

氏 名	美麗 和子
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人 21 号
学位授与年月日	2020（令和 2）年 3 月 17 日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第 3 条第 3 項第 1 号
学位論文題目	建国初期中国共産党の「中央民族訪問団」 —少数民族地域への対応と政策— “The Central Government’s Delegation to the Ethnic Groups” (<i>Zhongyang Minzu Fangwentuan</i>): A Study of the CCP’s Ethnic Minority Policy in the Early PRC
論文審査委員	主査 教授 聶 莉莉 副査 教授 茂木 敏夫 副査 法政大学国際文化学部教授 曾 士才 副査 国立民族学博物館名誉教授 横山 廣子

内容の要旨および審査の結果の要旨

I. 論文内容の要旨

本論文は、新中国建国直後に実施された民族工作の一つである「中央訪問団」に関する研究である。中央訪問団とは、1950 年から 1952 年にかけて共産党中央が西南、西北、中南、東北・内蒙古など少数民族居住地域に派遣した使節団であり、これは、中央政権が各地の少数民族と初めての公式な直接の接触であった。

この事業は、新中国における少数民族工作の前奏として広く認知されてきたが、これまで総合的、体系的に研究されてこなかった。

本論文の検証課題は、主として四点ほどある。

第一に、中央訪問団の組織体制と活動内容を明らかにする。具体的には、組織構造と成員構成、活動期間と行程、活動範囲、工作の任務と方法、様々な活動の内容などであ

る。

第二に、この時期の中共指導者の民族工作に対する基本認識を分析する。国土面積のおよそ6割を占める地域、全国の2万キロメートルを超える陸地国境の沿線に居住する少数民族について、指導者たちは、何を喫緊の課題として認識し、どのように対処しようとしていたのか、建設中の新しい政治システムに少数民族をどのように位置づけようとしたか、などの問題を探求する。

第三に、訪問団が調査した少数民族の事情を分析する。少数民族の社会、文化、政治、経済、宗教などを、訪問団がどのように調査し、把握し、描いたのか、訪問団員の現地調査に基づいた報告書を読み解くことで明らかにする。

第四に、訪問団員が著した回想や日記から、少数民族工作の現場の状況を再構成し、共産党中央の方針が現場でいかに貫徹されたか、また上の方針と少数民族地域の実情との間にどのような矛盾や齟齬が生じたか、団員個人の目や体験を通して検討する。

本研究の依拠する資料は、四種類に分けられる。1. 当時共産党中央委員会及び各省党委員会が発行した機関紙、少数民族関連の雑誌、書物などの出版物。2. 中央訪問団により作成された調査報告書。3. 中央指導者と訪問団責任者の談話録（内部発行と公式出版物の両方が含まれる）。4. 訪問団員たちの回想録、日記。

中央訪問団に関する考察を通して、中国における少数民族地域の独自性を理解するうえで、中国共産党が少数民族に対する政治統合のプロセスや、その政治手法の論理と性格を把握することを目指す。

II. 審査の結果の要旨

1. 論文の構成

本論文は6章から構成される。

序章は、研究の視点や対象を明らかにしたうえで、本研究と密接に関連する先行研究を、少数民族政策、少数民族と中央政権との関係、少数民族の社会と文化、中国における民族学と政治、建国前後の中国少数民族研究などの領域に分類し、それぞれについて代表的な著述や関連する知見を検討している。

第一章は、相前後して派遣された四つの訪問団の全体像を把握することを目的とし、訪問団の組織体制と活動内容を明らかにし、各訪問団の目的や特徴について比較考察をしている。

第二章は、中央指導者、特に鄧小平と訪問団長で、少数民族出身の共産党幹部である劉格平の講話を分析し、彼らが、それぞれ中共の少数民族に対する基本政策をどう捉えていたのかを考察している。

第三章は、訪問団による雲南省と貴州省の調査報告書を分析し、調査報告に叙述された少数民族社会の政治統合や、経済生活、風俗習慣、宗教信仰、民族間の関係などに関する状況を、筆者の視点で整理し、実状をよりリアルに提示する一方、訪問団員が地域社会の現実を捉える際に持っていた、明らかに共産党のイデオロギーに依拠している基準や枠組み、例えば、マルクス主義政治経済学による生産力と生産関係の調査と分析、階級闘争思想による階級状況の分析などもそこから見出し、その画一性を指摘している。

第四章は、訪問団員であった、少数民族出身の共産党幹部王連芳の回想に基づき、訪問団員の目から見た当時の少数民族社会の様々な側面を整理している。

終章は、全篇のまとめとして、中央訪問団の活動から共産党政府と少数民族との関係性の構図を分析し、中共の民族政策の主眼である「民族団結」と「民族平等」の論理を分析している。「団結」とは、共産党政権の下で「先進的な民族」とされた漢族が「牽引」する団結であり、「平等」とは、イデオロギーによる政治統合の体制において個別民族の個性を超えた「人民」としての一律性に重点をおくものであると指摘した。

2. 論文の特徴

本論文は、以下に述べる特徴が見られる。

第一に、中央訪問団という一つの歴史的出来事を詳細に明らかにすることを通して、建国初期の共産党政権の少数民族に対する政治統合と民族政策の雛形を考察しようとした視点に独創性が認められる。訪問団の組織や活動など実務的な面を再構成したのみではなく、それらに体现された観念や政策の骨格など思想的な面をも読み取ることに成功している。

第二に、関連資料を幅広く収集し、丁寧な分析した。

研究対象とした資料は、党の機関紙や新聞、調査報告書、関与した指導者や責任者の談話、訪問団員個人の回想録などの記録文書を含み、中央民族訪問団に関する従来の個別研究が依拠したデータの域を大きく超えたスケールを有している。さらに資料データを図表に整理したり、統計的数値を割り出したりするなど、訪問団の特徴を実証的かつ分かりやすく描出している。関連資料は、現在入手できるものは既に幾度も編集や校

閱を経て改変されており、種々の資料の制約があるが、資料の改変の実態自体にも着目し、客観性に配慮した整理と分析に努めている。

第三に、中央訪問団の活動に携わる様々な立場に立つ者、即ち共産党中央指導者、訪問団長などの責任者、思想改造を経て重任を与えられた著名な民族学者、少数民族出身の共産党幹部、文物研究の技術者などを取り上げ、それぞれの視点や、果たした役割、活動している現場の状況を考察し、訪問団の様態、訪問団と少数民族との接触状況を多面的に提示し、厚みのある叙述をなした。

第四に、本研究を通して、建国直前から 1950 年代中期までにおける共産党の「民族工作」の基本的な動きが提示された。本論文により、1949 年の「中国政治協商会議共同綱領」、「民族識別工作の前奏」と位置づけられる 50 年から 52 年かけての中央訪問団の派遣、53 年からの民族識別調査、56 年からの社会歴史調査へと続く流れと繋がり、それぞれの目的の違いなどが明らかになり、この分野の研究者にとって本論文は格好の手引き書になるものと思われる。

3. 論文の評価

本論文は、中華人民共和国の建国初期に国内各地の少数民族地区に派遣された「中央民族訪問団」に焦点を絞り、関連の文献資料を広く渉猟し、その実態を多方面に明らかにし、新中国の民族政策の成り立ちと性格を解明しようとした意欲的な研究である。

中央民族訪問団については、これまで総合的、体系的に研究されたものがないなか、丹念に分析をした力作である。

一方、論文の弱点や不備もいくつか指摘された。例えば、先行研究や関連研究に対して本研究が新たに加えた知見をもっと明確にすべきこと、建国当初の民族平等政策と現在の民族区域自治の形骸化などの歪みとのギャップという自らが提起した問題に関する分析をもっと深めていくべきこと、王朝時代の政治文化が共産党の民族政策に対する影響に関する議論がやや短絡的であること、などである。

全体的には、本論文は独創的、丁寧な研究であると評価し、博士の学位授与に値するものであると、審査委員は全員一致して判断した。

4. 最終試験の概要

2020 年 2 月 13 日に最終試験を一般に公開する形式で行った。審査委員各位からコメ

ントと質問がなされた後、受験者が応答した。上記諸指摘について、自らの見解を言葉で説明し、論文の文章表現の不明瞭による疑問を払拭したものもある一方、これからの課題として、さらなる研究を進め、改善していくべき問題点も明確化された。

外国語（中国語）の試験は、下記の要領で同日の午後に行い、与えられた中国語の文献を正確に翻訳することができた。

試験時間：午後 3:00～4:00

内 容：民族自治法に関する文献を翻訳する